
オンラインゲーム『ジ・ユード・タカーイ・オンライン』 隠れ鬼と袴の王様

今ダ 果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オンラインゲーム『ジ・ユード・タカイイ・オンライン』 隠れ鬼と袴の王様

【Nコード】

N8482Z

【作者名】

今ダ 果枯

【あらすじ】

オンラインゲームをプレイしている少女のターニングポイントとなる一日。

私、中野 茜は、今日もオンラインゲーム『ジ・ユード・タカイ・オンライン』にふけていた。

『ジ・ユード・タカイ・オンライン』は自由度の高いオンラインゲームである。

確か、元々は同人ゲームから始まったとか何とかで。ファンタジー系のオンラインには珍しく、いや、まあ、今となってやあまり珍しくないことだが、ジョブと言うものがない。と言うより示した戦い方によって周りから「格闘家っぽい」とか「魔法使的」とか評価を下されたのがジョブになる訳で、ゲームシステムとしてはジョブと言うものは存在しない。

今の時代には、カプセル型体感ゲーム機『ココス C O C O ' S』と言うものがある。

私にも仕組みとかは、よくわからないけど、ちょうど酸素カプセルのようなものの中にあるシートに腰を下ろし。眠るように意識を落とすと、仮想現実の世界で目を覚ます。

カジノがあつたり、ビジネス目的で使う人がいたりと割とゲーム以外の使用用途も多いみたいだ。

私は今日も『ジ・ユード・タカイ・オンライン』の自宅で料理研究家プレイを楽しんでいた。

「うわ、コツマ菜、減ってきたな。ついでにハヤウサギの肉も取りに行こうかな」

私は『ニンキ王国』の東の外れにある、森の中に一軒家を構えていた。

いやあ、偶然みつけた食の組み合わせが思っていた以上の効果とおいしさで、それで相当儲かった。初心者ではあり得ない程の大金

を得ることになったので。町の外れの森の中の家を買った。流石に王国内の家を買うのは無理だったが、初心者にして拠点がある時点で結構すごい。

弓を持って家の周りをうろつく。

家の外はすぐにフィールドなので食料調達に困った事は無い。

「見つけた！」

私は早速ハヤウサギを見つけた。

「よし」

距離もオーケーだ、弓を引く。もちろん毒は使わない、そんなもの使ってハヤウサギの肉が食べられないものになっては困る。

パスッ。

「よしっ！」

私の放った矢はハヤウサギの頭を射抜く。一撃。

「ふふふふ」

流石、私。と言うか弓の性能が良いだけだが。

今更だが、『ジ・ユード・タカーイ・オンライン』はポイント振り分け制のゲームである。まあ、自由度の高さは、ここに関わってくる。

例えば魔法を使いたければ『魔法』と言う項目にポイント割り振れば魔法が仕えるようになる。もちろん振り分けるポイント高ければ高いほど得られる効果も高くなる。

『魔法』のスキル以外にも『剣術』や『会計』『採取』『料理』『裁縫』と種類は無数にあり、更に『魔法』と言うスキル項目の中にも『攻撃魔法』や、『炎魔法』と言った具合に一部に特化したものも多く存在し、そういうスキルは通常のものより低いポイントで大きな効果を得ることが出来る。

そんな中から自分がプレイに必要なと思うものにポイントを割り振り自分だけのプレイスタイルを極める。それがこのゲームの醍醐

味だと言っても過言ではない。

「さて、ハヤウサたん、どこだ、うへへへ」

完全に女、棄ててるけど、ここは森奥だし。どうせ誰も見てないし。

「ねえ！」

何！！ 私は振り返る。結構かつこいいプレイヤーが立っていた。「何でしょうか？」

「僕の為にキミの持ち金全部置いていつて欲しいんだ」
前言撤回、全然かつこよくない。くたばれイケメン。

「えーと、無理だといったら？」

かつこ悪い男は片手間に頭をかき、魔方陣を展開しながらニヤニヤと嫌な笑いを作る。

「プレイヤーキラーですか、関心しませんね」

プレイヤーキラー、他のプレイヤーを襲ってそいつがドロップする持ち金やアイテムを奪うクズのこと、またその行為を言う。

「説教なんて聞きたくないんですよ」

男は、強力な炎魔法を発動する。

「ばかつ！ こんなところで炎魔法なんて使ったら！」

山火事と言うか森火事？ が起こる。私の家が燃える。

そう思いつつも炎魔法の影に身を隠しながら距離を取る。

弓を引き頭を狙う。ヘッドショットは私の攻撃手段の中で最も威力が高い。

「あはは、甘いっての」

「なっ！！」

男は自分の炎魔法を突っ切り私の首を押さえる。

「『耐火』のスキル！？」

「正解」

男はニヤニヤと笑い。よく知ってるねえとでも言いたげな顔だ。私の友達に消防士プレイをしてた奴がいたから知っていた。

そんな中、男は強力な炎魔法を構える。
死んだわ、私。

「いやー、プレイヤーキラーなんて関心しないですねえ」

「誰だ!!」

どこからとも無く森の中に声が響く。

「後ろですよ」

男が後ろに振り返った瞬間。男は真横から殴り飛ばされた。

「あはは、こんな古典的な手に引っかけちゃだめですよ」

どこからとも無くスーツを着た男、声の主が表れる。

「えっと、あなたは？」

「ああ、僕は『隠れ鬼』です」

「隠れ鬼？」

「えーと、れっきとしたプレイヤー名ですよ？」

「す、すいません、私は『アカネ』つていいです」

『隠れ鬼』さんは少し考える。

「ああ！ サワサワ蟹のソースとか、おどおど牛のコトコト煮で有名な」

「あつ、はい」

ちよつと照れるな。うん。

「おい、『隠れ鬼』やっていいのか」

気付くと目の前には上半身裸の、袴はかまを履いた男が立っていた。多分、プレイヤーキラー野郎を殴り飛ばした人だ。

「誰ですか？」

「『袴の王様』です」

「違う、『大木 真一』というちゃんとしたユーザー名がある」

「『袴の王様』？」

なんだか思い当たる節があるような？

「俺を無視すんじゃないよ」

いきなり痺れを切らしたようにプレイヤーキラー野郎が叫んだ。

「あれ、早速理知的な態度を取っていたメツキが剥がれましたか」
『隠れ鬼』さんは少し楽しそうな表情をする。

「えーと、あなたがユーザー名『放火魔ん』さんですか」
なにそのダサイプレイヤー名。

「なんだよてめえら、俺のお楽しみの邪魔しやがって」

「やつちまうぜー!! 『隠れ鬼』」

『袴の王様』が苛立たしげに怒鳴る。多分、元来乱暴な性格なのだろう。

「ええ、どうぞ」

!!。

その瞬間だった。自分の存在が消えた。何を言っているのか、わからないと思うが。私も何をされているのかいるのか、わからない。自分すら認識できない状態だった。

『ジ・ユード・タカイ・オンライン』において他のゲームでは、あまり見ない一風変わったシステムがある。

『由来システム』……だったかな? ゲームのプレイヤー名を決めたときにその名前に関係ボーナスとして最大2ポイント、その前に由来するスキルにポイントが割り振られるシステムである。そのシステムを入れるとこのゲームで割り振れるポイントは最大1002ポイントになる。

『放火魔ん』おそらく、『炎魔法』なり、『耐火』なりのスキルにボーナスポイントが入ってると思う。『隠れ鬼』さんは、多分『隠密』とか。

「なっ!!」

『放火魔ん』は驚く。まあ私も驚いているのだから、あたりまえか。

「いや、あいつら気にしなくてもいいから、てめえは俺だけを見てるって、どうせ俺にやられるんだから」

『袴の王様』さんは、ゆつくりと構える。空手とかやってるのかなあ。

「てめえ！」

「いいぜ、来いよ、一発、入れさしてやるから」

その言葉に切れた『放火魔ん』。巨大な火の玉を打ち出す。

「大丈夫なんですか!？」

私はそこにいるであろう『隠れ鬼』さんに叫びかける。

「えーと、大丈夫じゃないんですか？ 相手、もう負け犬オーラばんん出してますけど？」

いや、そういうことじゃなくて!!

「心配性ですね、『アカネ』さん、彼はあれでも結構チートですよ？ まあ一対一の正面戦闘なら誰にも負けないんじゃないですかね？」

「『袴の王様』、あつ!!！」

思い出した。上裸で暴れまわる袴を履いた裸の王様。

「去年の『ニンキ王国決戦』の優勝者の!!！」

「やっぱり、有名ですかねえ」

「心頭滅却すれば火もまた涼し！ 渴!!！」

火達磨になった『袴の王様』が叫ぶ。

「「なっ!!？」」

私と『放火魔ん』は驚愕する。

火達磨になっただけの『袴の王様』は「渴」の一言で火を振り払い平然と無傷で立っている。

「歯、食い縛れ!!！」

王様は拳を構え。放火魔はガードしようと構えた。

ただ。次の瞬間『放火魔ん』は星となった。目にも留まらぬ高速の拳を真正面からガードすることも出来る訳なく打ち込まれたのだ。「ヒャッハー!! プレイヤーキラーざまあー!!！」

『放火魔ん』散々である。

「あの、本当にありがとうございました」

うん、あの後、私は家に二人を招き入れた。

「いえ、いえ、気にしなくていいですよ」

「ああ、全然気にすることねえぜ」

とりあえず、ホットケーキをご馳走した。

「おお、うめえ」

「そうですねえ、おいしいですねえ」

『袴の王様』さんはがさつだけど結構いい人だ。あっちから話掛けてきてくれるし。言葉づかいは汚くて上裸で目のやり場に困るけど、基本ストリートな人で接しやすい人だ。

『隠れ鬼』さんは、よくわからない。基本いつもニコニコしていて。その表情を常に保っている。ある意味ポーカフェイス。気さくな感じに接してくれるけど。内心はどうなんだろうか？

「そういえば、王様さんは格闘家なんですか？」

武器を持っているようには見えないし。正拳突きだったし。

王様さん困ったように、鬼さんは面白そうに顔合わせる。

「格闘家って言われてもなあ？」

「そうですねえ」

確かに炎を振り払うなんて格闘家にはできそうに無いけど。

「振り分け画面見せたら早いんじゃないですか」

鬼さんは王様さんに進言する。

「まあ、そうだな」

王様さんは少し操作したあと、振り分け画面を渡してくる。

「拝見させてもらいますね」

「おう」

人の振り分け画面を見るのは初めてだ、若干緊張する。

『気合い』1000、……？

「え？」

『気合い』ってなんだ？ 『気合い』全フリってどういうこと！
？ 鬼さんの方を見るがニコニコしている。

「き、『気合い』ってなんですか？」

王様さんに尋ねてみる。『気合い』なんてスキル初めて聞いた。

「うん、わからん！」

王様さん！？

鬼さんの方を見る。

「まあ、何でしょう、『気合い』があれば何でも出来る！ みたな
感じですかねえ？」

「なんでも出来るってどういうことですか？」

「どうということって言われても。なあ？」

「そうですねえ」

ここで鬼さんが一息つき。言葉を続ける。

「まあ、戦闘に関することならほとんど何でも出来ますねえ、まあ、
『気合い』は戦闘系スキルなので」

「だから、その何でもって言うのは……」

「さつき見たいに音速を超える正拳突きを繰り出したり、大魔導師
並みのメテオを打ち出したり、打ち返したり。瀕死から全快まで回
復したりもう色々ですね」

「なっ！ 最強じゃないですか!？」

そんなことであれば『気合い』なんていうのがマイナースキルな
訳がない。

「最強といっても実質『防御』のスキルにポイント振ってる訳じゃ
ないですし、『隠密』とか『暗殺』とかのスキルで不意打ちされた
ら、ほぼ即死ですし。それに、このスキル全フリでもしなきゃ、全
然使えないスキルですしねえ、まあ、マイナーって言うより知って
る人もそこそこいるけど、そこに全フリするほど馬鹿じゃないって
ところかなあ？」

成る程、私はいらない。

「散々、いつてくれるなあ『隠れ鬼』さんよお」

「あはは、怒らないで下さいよ王様」

「それにしても『気合い』全フリって、『調理』とか『調合』とか『鍊金』とか何にも出来ないってことですよね」

「ですねえ、それですねえ『アカネ』さん」

「はい？」

「具体的には言えないんですけど、私のポイント割り振りもそんな感じなんですよねえ」

「偏ってるって事ですか」

「そうです」

「『アカネ』さん、僕らと一緒にパーティ、組みませんか？」

王様さんは黙ってこちらを見ている。

「いや、でもレベルとかも低いと思いますし、その足引っ張るとい
うか、付いていけないと思いますし」

「レベルなんて関係ねーよ」

「そうですよ、レベルなんてちょっと努力すればすぐ伸びますか
ら」

はあ、『袴の王様』さんはともかく『隠れ鬼』さんは、わざとか。

レベルとかじゃなくて、あなた達のテンションに付いていける気が
しないんです。

（後書き）

アクションが書きたくて、書いたんですが……あれ？

一部『TRPGをプレイしよう。』と言う、わたくし著の短編から設定を流用しています。

クロスオーバーなどはしませんがそちらも読んでみると理解が深まるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8482z/>

オンラインゲーム『ジ・ユード・タカーイ・オンライン』

隠れ鬼と袴の王様

2011年12月26日21時59分発行